

# いのちと地域を守る

# 防災・減災のページ

●「必ず氾濫」想定 吉田川沿いに住む者として、必ずどこかが氾濫するという意識が体に染み付いている。大丈夫だろうと思いつつ避難するのはそのためだ。台風19号で犠牲者はいなかったが、消防団の機転がなければ危なかった。教訓を今後の訓練に生かし、早めの避難を徹底したい＝中粕川地区長・赤間正さん(70)



●地域で行動検証 地域の知っている人に呼び掛けられたので「避難しなきゃ」と考えた人も多かったはず。日ごろの近所付き合いの大切さを感じる。この2年、復興に集中してきたので、あの時どう行動したか、それが正しかったかの検証はまだ。いつか地域で検証しないとけない＝中粕川副区長・高橋俊昭さん(64)



●考えの変化認識 高齢者は昔の経験から「動なくても大丈夫」と考えがちで注意が必要。父がそうだった。ペットがいると「避難所に行けない、行きたくない」との心理も働かす。時間が経過してからの振り返りは、当時と考えが変わった点を認識できて有意義だった＝中粕川実行組合長・赤間克也さん(62)



●訓練で絆強まる 猫を飼っているため2年前は避難所に行けなかった。ペットがいたり、認知症の高齢者がいたり、さまざまな事情で避難できないケースがある。避難しやすい環境をどう整えるのかなど改善や検証が必要。さらに訓練も再開すれば、地域の絆も強まる＝前中粕川区会計・佐藤和夫さん(72)



●ドローン活用を 台風19号では町の災害対策本部に詰め切りで対応した。何でも話せる関係を築けていたから、地元とは常に情報を共有できた。今後は川に近づかないで済むよう、ドローン活用など安全に河川状況を確認できる工夫も必要。もっと被害を減らせるようにしたい＝大郷町消防団長・鈴木安則さん(63)



●守る側も安全に 台風19号では地域を巡回し、住民の安全確保に努めた。災害では命を守る側が犠牲になるケースもある。事情があって避難しない人、できない人もいると思うが、住民に速やかに避難してもらえと、住民も消防団も安全を確保できる。さらに災害に強い地域になる＝大郷町消防団12部部長・熊谷宏弥さん(44)



●情報の共有大切 台風19号ではとにかく急いで大崎市の娘の家に避難した。以前は避難所に行っていたが、眠れなかった。娘からは避難が必要なのは来るように言われていた。避難所にいなかったら、今回聞いた話は知らないことだらけ。検証や記事は全てウェブサイトで読むことができます。



●むすび塾に参加して 大郷・中粕川

## むすび塾

### ■むすび塾に参加して

### 第102回巡回ワークショップ @大郷・中粕川



自主防災組織の役員と消防団員ら7人のほか、助言者として東北大災害科学国際研究所の佐藤翔輔准教授(39)が参加した。地域では1986年の8・5豪雨など過去の水害が語り継がれ、危機意識が高かった。住民は2006年に自主防災組織をつくり、防災マップ作成や安全確認訓練を続けてきた。台風19号では町が午後2時10分の早い段階で避難準備・高齢者等避難開始(現在は高齢者等避難)を発令。自主防災と消防団は避難誘導や見回りに着手した。高齢者が早めに動き出し、近隣住民に避難先を伝える姿も見られたという。「全戸に避難の呼び掛けと安全確認を行い、住民の多くは避難所や親戚宅に移動した。避難指示に合わせて(行

## 台風19号豪雨教訓は

河北新報社は5日、通算102回目の巡回ワークショップ「むすび塾」を宮城県大郷町の町公民館中粕川分館で開いた。2019年10月の台風19号豪雨で吉田川の堤防が決壊し、中粕川地区は甚大な浸水被害を受けたが、大半の住民が早期避難したため、犠牲者はなかった。地域防災に取り組んできた住民が、当時の体験と行動を踏まえて教訓を確認し、今後の備えについて話し合った。

# 早期避難で犠牲者ゼロ



台風19号で公民館も浸水したことを説明する中粕川地区長の赤間正さん＝大郷町公民館中粕川分館



台風19号の経験を振り返ったむすび塾＝大郷町公民館中粕川分館

反省点もあった。13日朝の浸水後、消防団が避難せず取り残された高齢者に気づき、おぶつて救助した事例が報告された。鈴木安則さんは「避難断で避難所から自宅に帰った住民もいた。その後、堤防が決壊。佐藤准教授は避難解除前に戻さない工夫として「20年7月豪雨では、雨がやんでも川の水位が高かったため、と

難しかった人の中にはペットや持病、食物アレルギーなどの事情で避難所に行きにくい人もいた」と話し、避難所の充実を課題に挙げた。避難から一夜明け、自己判断で避難所から自宅に帰った住民もいた。その後、堤防が決壊。佐藤准教授は避難解除前に戻さない工夫として「20年7月豪雨では、雨がやんでも川の水位が高かったため、と

### 大郷町中粕川地区の犠牲者ゼロに学ぶ

町は各戸に設置した防災無線で早めに避難情報を発信  
高齢者は直ちに避難してください!



住民は警戒レベル3で避難所や親戚宅へ早めに避難開始  
大雨の前に隣の親戚の家にいくね



消防団、自主防災組織は早めの避難誘導後、自分たちも避難  
避難所や建物2階への避難確認しました



過去の水害を家庭や地域で語り継ぐ  
堤防が決壊して浸水したんだ



監修 減災・復興支援機構

イラスト さとうあけみ

### 2019年台風19号 大郷町と中粕川地区の災害対応

町の対応と気象・河川情報		消防団・自主防災組織の対応
14時00分	避難所開設	0分 消防団が公民館に集合
14時10分	避難準備・高齢者等避難開始発令	
14時30分	防災無線放送開始・広報車出動	
15時		0分 区役員が公民館に集合 戸別訪問し避難呼び掛け 避難意向の有無を確認
16時		20分 避難動向の報告終了 (自宅に残る世帯は10世帯) 45分 3夜以外の役員は避難所へ
10月12日	17時 大雨警報発令	
18時00分	災害対策本部設置	
18時40分	避難勧告発令	
19時		
20時		
21時58分	避難指示発令	
22時		0分 3夜、消防団が見回り (6世帯ほど2階に垂直避難) ※その後3夜、消防団は避難所へ
23時10分	大雨特別警報発表	
0時00分	吉田川水位6.76m	
1時		
2時00分	吉田川水位9.02m	
3時40分	吉田川氾濫危険情報	
4時00分	吉田川水位9.92m(最大)	
5時45分	大雨特別警報解除	
6時30分	吉田川堤防決壊	
7時50分	吉田川堤防決壊	

(注) 避難準備・高齢者等避難開始は今年5月に高齢者等避難に改称。ゴシックは気象・河川情報

## 堤防決壊 100棟が全半壊



中粕川地区で決壊した吉田川の堤防。地区では住宅被害が相次いだ＝19年10月13日午後0時55分ごろ、宮城県大郷町

2019年の台風19号は10月12日午後7時に伊豆半島に上陸後、13日未明に宮城県に最接近した。大郷町内は12日夕から雨脚が強まり、町は午後6時40分に避難勧告、午後9時58分に避難指示を発令した。

町に近い大衡観測所では12日午後11時20分から1時間で51.5mmの非常に激しい雨を観測。13日午前3時50分までの24時間降水量は309.5mmで、1976年の統計開始以降最大となった。

町を横断する吉田川の水位は13日午前2時、氾濫危険水位8.2mを上回る9.02mを観測。午前4時には9.92mに達した。中粕川地区の堤防では午前6時半に越水、7時50分に決壊を確認した。

中粕川地区には当時105世帯が暮らしていたが、濁流により住宅被害は全壊40棟、大規模半壊55棟、半壊5棟に上った。町全体の全半壊148棟のうち、3分の2を同地区が占めた。ほとんどの住民は12日に避難所や町外

の親戚宅などに避難し、無事だった。堤防決壊後、自宅に残った15人は、消防と消防団に救助された。

町は行政区ごとに自主防災組織の設立や、窓を閉めていても情報が伝わる戸別防災無線の全戸整備を進めていた。台風19号の教訓の継承と防災意識の向上を図るため、10月13日を大郷町防災の日と定めた。

## 「災害との共生」意識を

東北大災害科学国際研究所准教授 佐藤 翔輔さん(39)



中粕川地区を犠牲者ゼロと表現したが、話を聞いて避難所から戻った人や消防団に救助された人もいて、手放して喜ばないことを再確認した。犠牲者ゼロにするには「早期の自主避難100%」を目指さなければいけないと気付かされた。守る側の命を守るためにも目標として明示すべきだろう。

### 助言者から

東日本大震災をはじめとする自然災害の被災体験を振り返り、防災の教訓や課題を考えてみませんか。町内会や学校、職場など少人数の集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室02(211)150601。

むすび塾では2015年5月11日掲載宮城・涌谷町10区自治会編、16年10月10日掲載「大崎・古川」編などでも水害を特集しました。特集記事は全てウェブサイトで見ることができます。